

## 最終試験の結果の要旨

報告番号	保研 第 <b>36</b> 号	氏名	井上尚美
審査委員	主 査	山本直子	
	副 査	田平 隆行	副 査 松成裕子
	副 査	山下亜矢子	副 査 木山良二

主査及び副査の5名は、2023年2月22日10時から11時まで、学位請求者 井上尚美に対し、論文の内容について質疑応答を行うと共に、関連事項について試問を行った。

具体的には、以下のような質疑応答がなされ、いずれについても満足すべき回答を得ることができた。

- 【質問1】 助産院で就労している助産師が6.2%とあるが、これは以前と比べて減少してきているのか。  
 回答 分娩を取り扱う助産院は減少から横ばい傾向であるが、新生児訪問などを主に行っている助産院は少しではあるが増加傾向にある。
- 【質問2】 Freestandingという意味は、独立という意味で良いのか。  
 回答 助産師が自立性をもって助産に携わるという意味であると考え。
- 【質問3】 Freestandingの助産師が減っている中で、この指標を使って産科や助産院に関わらず質の高いケアにしていきたいのか、それとも助産院の助産師が増えてほしいのか。  
 回答 現状の医療体制や出産する女性の合併症の増加などを受けて、助産院の助産師を増やすというよりは、産科ユニットにいる助産師が助産師主導ケアのレベルを上げたいと考えている。
- 【質問4】 再テストの期間ほどのくらい空けたのか。  
 回答 1か月後に実施した。先行文献では1か月から5か月など幅があったが、今回の尺度は実践能力を測定するため、期間をあけるとその間に実践能力が向上する可能性があるため1か月とした。
- 【質問5】 アドバンス助産師の評価はどのようになっているのか。  
 回答 助産師経験が満5年以上、分娩介助例数100例以上、内70例以上は経腔分娩、21項目の必須研修の受講後に申請し、試験をうけて合格すると助産評価機構から認証を受けることになる。
- 【質問6】 助産師協会の認定なのか。  
 回答 日本助産評価機構の認証になる。
- 【質問7】 アドバンス助産師を持っていると診療報酬が受けられるなどの利点があるのか。  
 回答 乳腺炎のケアのみ保険診療報酬が適応されている。
- 【質問8】 introductionに英国では助産ユニットの出産が増えてきているとあったが、それはなぜか。  
 回答 英国は出産後の入院期間が短く新生児訪問など助産師が活躍するシステムがあること、国自体にも出産に対する自然主義のような考えがあり影響しているのではないかと考える。
- 【質問9】 文献レビューが6件だったが、6件しかヒットしなかったのか、選んで6件になったのか。  
 回答 尺度開発するにあたってケア内容が詳細に記載されているもの、研究対象者が5年以上の助産師経験をもつ者であることで6件を選択した。
- 【質問10】 外的基準がないということだったが、Freestanding以外の助産師の外的基準などはあるのか。  
 回答 アドバンス助産師を申請する際に使用するスケールがあるが、それは産科医療機関における助産師の評価スケールとなっている。今回の尺度は、場所に限定せずすべての助産師に使える尺度の開発であった為、外的基準として使用しなかった。
- 【質問11】 今回の対象者の中に助産院と病院の助産師が含まれているが違いはあったか。  
 回答 助産院の助産師は14名のみで検討できていないが、今後検討していければと考えている。

- 【質問12】ROC曲線の経験年数は何年でわけたのか。  
 回答 20年で分けた。
- 【質問13】限界に助産師の自己研鑽の部分が尺度の項目に入らなかったとあったが、質問項目作成の段階で外れたのか、因子分析で外れたのか。  
 回答 因子分析の中で外れた。
- 【質問14】アドバンス助産師よりも低いグレードの方々のデータが少なかったので、自己研鑽部分がなくなったのではないか。  
 回答 対象者の半数がアドバンス助産師であり、自己研鑽を意識しない集団であったかもしれない。
- 【質問15】Freestandingという概念を使っているが、論文の中での用語の定義などがあるのか。  
 回答 助産ユニットを助産院だけにするのか、院内助産を含むのか迷ったが、今回の尺度はどこにいても助産師主導ケアができることを目指している。2つを網羅する形で定義し使用した。
- 【質問16】第1段階の専門者会議のテーマについて教えて欲しい。  
 回答 専門者会議では、質問項目が尋ねたいことがきけているか、実践能力にあった質問項目になっているか、質問項目の回答のしやすさ、質問項目数が妥当かについて討論した。
- 【質問18】4つの因子からどのような新たな知見が得られたのか。  
 回答 因子の中に、五感を使うや情報を統合するなど助産師の経験知を使うなど、助産師主導ケアでもレベルの高いところが提示できたのではないかと考えている。
- 【質問19】限界に今後の活用が書かれているが、今後の一般可能性についての展望はどうか。  
 回答 母集団を増やしていくことや、他者評価のある対象者での検証をしていきたい。また、トルコや中国などから母国語への翻訳希望がきているので、今後は海外のデータなどと比較するなどして検証を重ねていきたいと考えている。
- 【質問20】尺度の選択肢を頻度と%で作成しているが、設問にどのような工夫をしたのか。  
 回答 開発の初期段階では行動の程度を使っていたが、項目に助産師の基本的な実践が含まれている為、高い評価に偏りがみられたことから、実施頻度へ変更を行った。また、%表記をしたのは、回答者の主観の影響を少なくするためである。
- 【質問21】教育として実践能力を育てるためのポイントをどのように考えているか。  
 回答 リフレクションが大事で、自分の何をどのように振り返るのかのポイントと方法を基礎教育の中で修得する必要があると考えている。
- 【質問22】今回の尺度は基準関連妥当性のみであるが、今後どのように妥当性を検討していくのか。  
 回答 アドバンス助産師の中でも取得後経験を積んでいる者と取得後すぐの者との比較など、専門能力の高い人たちの中での検証や、他者評価を得ている対象での検証をしていきたい。
- 【質問23】専門者会議の構成メンバーに基準を設けたのか。  
 回答 基準は設けなかったが、実践が思い浮かべられ、実践の実際が分かることにポイント置いた。
- 【質問24】第III因子の母児の持つ機能を活かしながらとあるが、具体的にどういうことか。  
 回答 児頭の回旋など分娩機転のことを機能とし、正常な機能を使いながら、ということである。
- 【質問25】今回、分娩期に着目した理由は何か。  
 回答 助産師のオリジナルの部分であり、対象の方が一番助産師を求めている時期であること、質の高いケアで女性の自己成長の機会を作ることでもできればと考えているので分娩期とした。
- 【質問26】分娩期以外の妊娠期や産褥期などの助産師の実践能力を測定する尺度はあるのか。  
 回答 検索していないため、はっきりしたことはわからないが、尺度の存在は印象に残っていない。今後開発されることが予測されると考える。
- 【質問27】アドバンス助産師数の現状はどうなっているのか。  
 回答 2020年現在で9,032名となっており、増えているがやや横ばい傾向である。
- 【質問28】助産師主導ケアについてどのように考えているか。  
 回答 助産師が母児の状態の判断やケアの判断を独自に行うことだと考えている。

以上の結果から、5名の審査委員は本人が大学院博士課程修了者としての学力と識見を十分に具備しているものと判断し、博士（保健学）の学位を与えるに足る資格をもつものと認めた。